

はじめに

遺伝性血管性浮腫 (hereditary angioedema : HAE) は、認知度の低い希少疾患です。わが国では、国立循環器病センターに所属されていた児玉順三先生が1970年代にHAEに着目した研究を始められ、すでにブラジキニンが発作の出現に重要な分子であることを唱えていました。そして当時C1-インヒビターによる治療が始まっていたドイツと日本を行き来し、世界で三番目にC1インヒビター製剤の使用を可能にしておりました(保険収載は1990年)。しかし、その後日本の診断および治療環境に大きな変化は見られず、われわれ医療人が努力を怠っていたといわざるを得ません。

2005年頃から、医師や製薬会社の活動によりHAEの啓発活動が再開され、研究会や学会のセミナーでHAEを取り上げてくださる機会が増えはじめました。さらにインターネット上にいくつかのホームページが開設されたことにより、潜在していた患者さんが診断される機会が急激に増えています。一方、患者会の設立、新薬の治験開始、臨床および基礎研究の萌芽も見え始めており、遅ればせながら状況は改善の方向に進んでいるように感じています。HAEの発作は体のさまざまな部位に起こり、患者さんが受診する診療科も多様です。この特殊性から医師同士の情報交換の機会も少なく、主治医も孤立してしまいがちです。

このような現状の中で、医薬ジャーナル社より千載一遇のチャンスを与えられ、診療のよりどころとする書籍を作成することになりました。本書では、日常的にHAEに深く関わっていらっしゃる方々に執筆を依頼いたしました。どの項目も実臨床でのご苦労やさまざまなご経験を背景に解説されています。本書が患者さんやそのご家族にとって、少しでも安心した日常生活を過ごすための手助けになることを期待しています。

2016年7月

埼玉友草加病院院長

大澤 勲